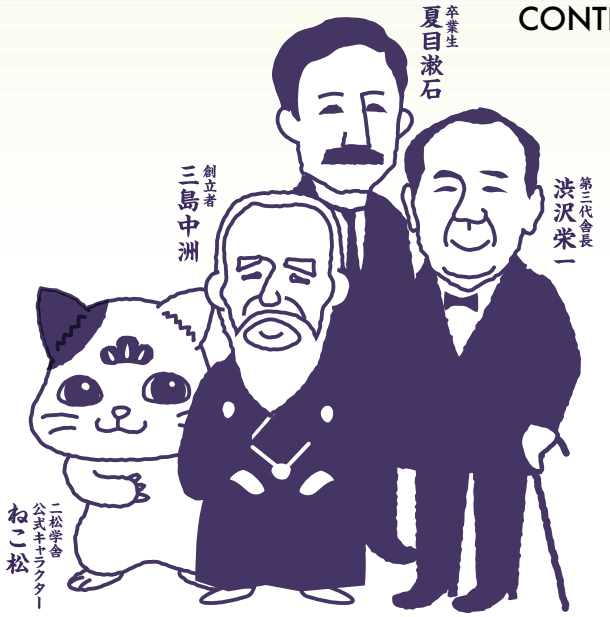
二松學舍 松苓会報



CONTENTS

P2 会長就任のご挨拶　新体制組織図　新三役決定
P3 令和5年度「第28回松苓会定期総会」開催報告
P4 在任中を振り返って－松苓会前三役ご挨拶
P6 松苓会支部長だより③　－関西支部特集－
P10 学生会員だより　新学生会長ご挨拶
P11 サークル紹介（合気道部・総合遊戯サークルのほほん）
P12 特別寄稿　三つの縁に結ばれて 漱石 青春の日の岡山（前編）
P14 卒業生の出版図書
P15 令和5年度松苓会予算・令和4年度松苓会収支決算書
P16 事務局だより　物故者　編集後記

No.70 2023年10月1日
二松學舍大学同窓会広報誌

2022年10月に145周年を迎えました
145th anniversary since1877

会長就任のご挨拶

二松學舍松苓会
会長
平野　光治

本年度より会長を勤めさせていただきます平野光治（ひらの　みつはる）と申します。平成二十三年度より神奈川県支部長を受け、平成二十六年六月より本部のお手伝いをさせていただいておりました。

当時、支部の現状や本部への要望を伝えたいとの願いを持っておりました。しかし、その思いよりも松苓会の事業推進や課題に取り組むことのみで精いっぱいでした。

前会長の廣田克己様が大学との交流を深めながら本部の改革に取り組まれました。基本問題検討委員会準備委員会、基本問題検討委員会を経ての新体制構築でした。

その功績に感謝して、新たな組織と予算を活かして松苓会の目的達成に向けて努力してまいります。

三役全員が新任でのスタートとなりました。「松苓会の目標達成のため、個人ではなく組織として全てに対応していく」との基本方針を掲げました。今は担当者がいないのでわかりませんと言わない本部にしたいとの願いもあります。そのために、自由に発言できる環境の中ですべてを知り、論議し、方針・結論を出し、行動する。本部三役の共通理解を図るよう努めております。

「伝統」とは創立何年という年数だけではなく人と人とのつながりであると私は考えています。同じ大学で学んだ人と人がどうつながっているか。また社会において卒業生が一瞬にして学んだ時代に戻れる関係が存在するか。そんな人間関係こそが伝統そのものであると考えます。松苓会本部や全国の支部がその一つ一つの場になれば幸せです。

会員の皆様のご意見に耳を傾けながら事業の推進に努めてまいります。疑問、ご意見を伝えてくださることを願います。会員皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。

二松學舍松苓会組織図（会則付表 1）

役職	本部	三役会議	会長（総会にて承認選出）
			副会長（常任幹事会にて選出）
			幹事長（常任幹事から会長が指名）
		常任幹事会	常任幹事（幹事から会長が指名）
			幹事　…　下記の（ア）（イ）（ウ） （ア）支部代表幹事（各支部長） 第 7 条第 3 項の各都道府県支部の支部長 （イ）同期会代表幹事（各同期会代表） 第 8 条第 3 項の各同期会の代表 （ウ）会長指名幹事 第 5 条第 1 項第 1 号から第 3 号の会員のなかから指名
	事務局（会長の命により幹事長が統括・掌理）		事務局長（会長が指名）・職員
	総会（最高議決機関）		
	松苓会顧問（会長委嘱）		
	松苓会相談役（会長委嘱）		
本部役員	監事（総会にて承認選出）		
部会	1 事業部会	2 組織部会	3 広報部会	4 総務部会	○
松苓会員	①正会員 ・専門学校・大学の卒業者 ・大学院修了者（博士課程満期退学者を含む） ②準会員 ・中途退学者のうち、正会員が推薦し、常任幹事会で承認した者 ③特別会員 ・母校関係者にして、会長が推薦した者 ④学生会員 ・母校の学部・大学院在籍者 ⑤教職員会員 ・母校の専任教職員		

松苓会「新三役」決定

総会にて松苓会の新たな会長として承認された平野光治会長が招集する初の常任幹事会が七月十五日（土）に開催された。常任幹事委嘱状が手渡された上で、三役会の構成について協議され、副会長には金井康常任幹事、星野優子常任幹事、大山由美子常任幹事が選出され、幹事長には髙柳幸雄常任幹事が指名され、共に承認された。

今後はこの五名を核として松苓会本部事務局の運営がなされることとなる。

令和三年七月の総会で全面改正がなされた新「会則」の全面的な施行となる。本会の業務を分担して執行するのが常任幹事であり、大きな役割を担うはずの「部会」組織の活動がいよいよ緒に就く。

令和5年度「第28回松苓会定期総会」開催報告

令和5年度の定期総会が令和5年6月10日（土）14時から二松學舍大学九段3号館3041教室で開催された。

当日は水戸英則理事長、中山政義学長、五十嵐清常任理事が臨席された。

総会は、西園隆士常任幹事により開会が宣言され、小林公雄幹事長から、支部長交代、同期会幹事、及び幹事の新規委嘱について報告があった。続いて前回の総会後に物故された松苓会会員及び大学関係者への黙祷があった。

佐藤修事務局長から構成員80名中出席者44名、委任状13名、議決権行使書提出者17名の合計74名の参加との報告があり、総会の成立が確認された。

廣田会長の挨拶に続き、水戸理事長、中山学長からそれぞれ挨拶があった。持田賢一副会長が議長に選出され、持田議長が、副議長に家永修副会長を、書記に高橋映子、志村孝両常任幹事を指名、議事録署名人には清水登長野県支部長（常任幹事）、河野千津子千葉県支部長を指名した。

議案審議

次第に従い議案の審議が行われ、第1号議案から第7号議案まで原案どおり承認された。

総会議案

1　令和4年度事業報告
2　令和4年度収支決算報告並びに監査報告
3　二松學舍松苓会諸手当支給規程、並びに二松學舍松苓会会則の一部改正について
4　令和5年度事業方針並びに事業計画（案）
5　令和5年度予算
6　松苓会役員改選について
7　学校法人二松学舎評議員候補者の推薦について

諸報告

1　支部運営等のお願い
2　松苓会役員・支部長・同期会代表幹事一覧

第6号議案は、廣田会長から、役員の任期が令和4年度を以て満了することを受け、役員候補者選考委員会において検討した結果として、会長に平野光治氏（40文）、監事に田邊義博氏（47文）と佐藤修氏（41文）が推薦されているとの説明があり、承認された。

第7号議案は、小林幹事長から、学校法人二松学舎評議員候補者の推薦についての説明の後、髙柳幸雄氏（49文）と大山由美子氏（47文）の両常任幹事を候補者としたいとの提案があり、承認された。

議案審議終了後、平野新会長から会長就任の挨拶、及び田邊・佐藤両監事の紹介があった。

※第2号議案（令和4年度収支決算書、監査報告）、第5号議案（令和5年度予算）はP15に掲載

松苓会幹事会

総会に先立ち、幹事会が午後1時から九段3号館3051教室で開催された。規程改正に伴い最後の幹事会となった。

支部長交代

島根県（令和5年3月26日付）
新　山平恭史（58文）
前　江角　仁（39文）
茨城県（令和5年4月1日付）
新　青山幸雄（49文）
前　沼田俊明（40文）

同期会代表幹事

（令和5年3月15日付）
第91期　大貫龍之介（91文）

在任中を振り返って―松苓会前三役ご挨拶

ありがとうございました

前会長
廣田　克己
（38文）

二松學舍松苓会（以下松苓会）に関わった約20年は、あっという間で、充実したものでした。

この間には多くの出会いがありました。大学と松苓会の区別もつかない私を受け入れてくださった故剣持武彦元神奈川県支部長、松苓会本部への道筋をつけていただいた故木村正雄元東京都支部長、それを快く迎え入れていただいた神津賢一郎元松苓会会長。

また常にお心遣いいただいた水戸英則理事長や渡辺和則元学長などの皆様には多くのことを学ばせていただきました。中でも、小林公雄前幹事長には支えていただいた、というよりも引っ張っていただいたことに感謝しかありません。そして、ここではお名前を書き切れませんが、関わっていただいた多くの皆様には本当にお世話になりました。

ありがとうございました。

平野光治会長率いる新体制で船出した松苓会に期待しています。頑張ってください。また、会員及び関係の皆様の益々のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、母校二松學舍大学と松苓会各支部、同期会の発展、そして会員の皆様のご健勝を祈ります。

禍（わざわい）転じて

前副会長
持田　賢一
（40文）

大学生の頃は、「学生運動」が全国的に盛んでした。改革や革命を訴える学生の一部は、「過激派」とも呼ばれ敬遠されておりました。私は「改革」という理念にはなじめずに卒業し、教職に就きました。初任は歴史的校風を継承し続ける伝統校、昔ながらの校風を保守する教育が地元では尊重されました。やがて時代は平成へ。私が管理職に就く頃、中教審答申を受け「急激な社会の変化に対応」し、いかに「魅力ある学校づくり」をするかが問われました。「保守」から「改革」への大転換でした。「改革」に向かわない学校は立ち行かなくなるからと。

松苓会に「基本問題検討委員会」が設けられ、委員を契機にやがて副会長を務めました。時流と将来を見通した検討の末に出した結論、その具現化が使命となりました。改定新会則が「改革」に向かう指針となっています。だが、制度を変えても、「改革」の真の実現は関わる人の「意識改革」しだいだと、前述の教職経験から思います。苦しめられたコロナ禍が、皮肉にもこの難題解決を援けてくれようとしている気がしています。世にいう「働き方改革」が好例です。松苓会が良き改革を進め、大学と共に発展することを祈り、副会長離任の挨拶とします。

不易流行

前副会長
家永　修
（44文）

私の60代は附属高校で生徒とともに『論語』を学び直したことと、松苓会との縁を深く感じたことです。支部活動経験もない中でのお誘いだったので大変驚きました。副会長拝命後、ほどなく新型コロナに翻弄されました。活動は大きく制約を受けました。

そんな中で新しい広報活動の必要性を求められ、会報誌の刷新に着手することになり

ました。同窓の先輩方の熱意と使命感には敬服しています。年齢を理由に挑戦を諦めることはありません。我々卒業生は青春時代の九段や柏キャンパスを懐かしみます。松苓会の活性化を目指し新しい組織作りとして事業に参画できたことは幸いでした。

昨年度は本学創立145周年の節目であり、新企画を打ち出すべく検討を重ねました。これまでの成果はひとえに編集委員会の皆様のお力によるものです。具体的には、創立者三島中州ゆかりの建学精神とその言葉、全国5地域の支部長だより等々です。「会員とともに作り上げていく」という自在な編集方針のもと、68号、69号、そしてこの70号と進化は続いています。さらには、ホームページの充実と関連付けて発信方法も工夫しています。年配者には懐かしさを、働き盛りには勇気と励ましを、若者には親しみを…と切に願っています。

『不易流行』とは伝統を残しつつ、進化することです。それこそが二松學舍の魅力の発信につながると確信しています。お世話になった皆様方には深く感謝申し上げます。

松苓会の発展を願って

前事務局長
佐藤　修
（41文）

六十歳で定年退職後、家庭で妻の母親の介護をしていました。それが一段落した後、縁があって松苓会の常任幹事の委嘱を受け、平成二十四年度に大学職員として松苓会事務局に配属されました。以後約十一年、神津・廣田両会長の時に神河幹事長・小林幹事長に仕えました。松苓会に従事したことで、役員・支部長の皆さんはじめたくさんの方と接し、いろいろ学ぶことができました。また学生時代には知らなかった大学の良さを再発見することもできました。

都心に近い二松學舍大学は、東京の私立大学の中で慶応・立教の次に創立された伝統ある大学です。漢学塾の後「国漢の二松學舍」と謂われたこの大学で学んだことで、卒業後は定年まで小学校に勤務。その当時は、卒業生の多くが教職の道に進みました。在職中は、国語教育関係に携わっていたことで現在も続けています。今後も国語の大切さを伝え続けたいと思います。

来年、一万円札の顔になる渋沢栄一は「論語と算盤」で道徳の重要性を説いています。今日本の社会に、正義の大切さが失われつつあるような気がします。このような時だからこそ、論語「義を見て為さざるは勇無きなり。（為政篇）」を強く訴えかけていくことが大切だと考えています。

今期、松苓会監事に選出されました。今後は、側面から会の運営を支援していくことになりますので、健全な同窓会のあり方を模索していきたいと思います。二松學舍大学と松苓会のますますの発展を祈念いたします。

感謝

小林公雄幹事長のこと

松苓会を36年間にわたって支えてくださったこと感謝に堪えない。

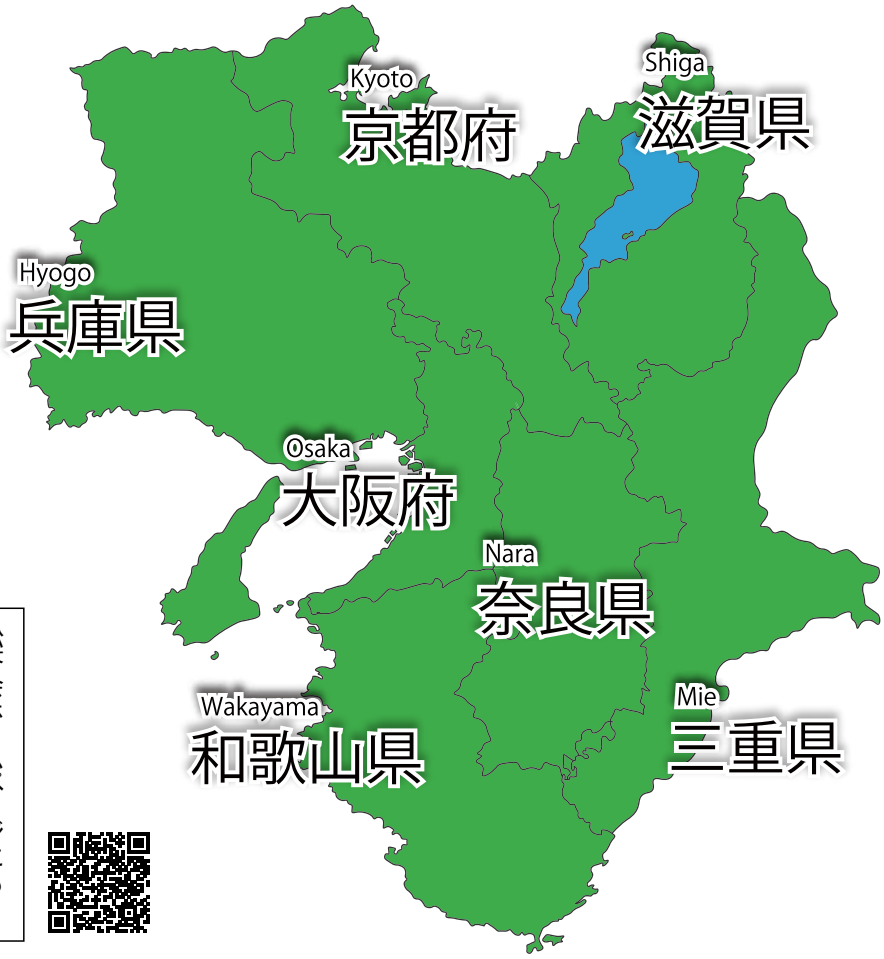
小林幹事長は「生き字引」で何を尋ねても応えてくださる。木訥で寡黙という印象の方である。会議資料の準備は綿密で、さらに議事録の正確さには目を瞠るばかり。いつも周囲を信頼の温かい目で見つめている。

少し体調を崩されたときも責任感が強く、奥様を伴って来校されて資料作りを黙々とされている姿を見る度に頭が下がる思いであった。

皆のために無償で動くことの意味を無言で示されていたのだろう。ご病気の恢復が待たれる。（片山聖英　50文）

皆を見つめる小林幹事長

連載 松苓会支部長だより③
―関西支部特集―



松苓会ホームページにも支部活動報告、お知らせが掲載されています。

三重県支部

二松學舍へ導いてくれた恩人

支部長　小川直紀（44文）

私の人生に、より深く関わってくださっている恩人がいる。書道の師匠であり仲人親でもある、前支部長の稲垣無得先生である。

神戸高校の生徒から、先生と同じ大学へ、更に教授であった金子清超先生に入門するのも先生の薦めであった。教授宅で週三回、漢文の素読から始まり、漢詩を作る「自詠自書」に邁進する。大学では、漢学を中心に書道、中国語を学んだ。二年時まで雨海博洋先生の伊勢物語研究会に所属する。三年時には石川梅次郎教授の「書誌学」をこっそり受講して、下校時にはいつも神田の古書街を散策。そして中央沿線の古書祭り等で、安価な和本を中心に資料収集していた。

卒論の関係でゼミは朱子学を、特に市川安司教授には、赤門をくぐりぬけ、陽明学を中国哲学研究室で学ばせて頂いた。大学より腕時計を頂き無事卒業。

兵庫県で教員、梅舒適先生に篆刻を学び、郷里に戻ってからは稲垣先生に書を学ぶ。退官後は三重大学人文学部での講述を許されるも、すべて稲垣先生のお陰で、先生には、感謝、感謝であるが、不肖の弟子にて申し訳ないと思っている。

現在、「てん刻書道」と呼称・提唱して、書を総合的に生徒達と学びあい、「書画同源」の世界に遊んでいる。

滋賀県支部

歴史ある近江の地

支部長　角井良暢（49文）

私の大学在学中には百周年の記念事業があり、歴史ある大学で学んでいること、学べていたことを誇りに感じておりました。大学を卒業して地元の学校へ勤め、その勤務校も数年前に百周年を迎え、多くの記念行事や事業を行いま

した。

百年という節目をそれぞれに経験して、私が日々生活を営んでいる地が本当に歴史ある場所であり、また文学の育まれた素晴らしい地であることを今更ながら強く感じています。

来年度の大河ドラマ『光る君へ』で話題となる石山寺は、住まいのごく近くにあります。また、比叡山の麓にある西教寺は、身内（叔父）が管長を務めておりましたが、明智光秀の墓石があります。歴史舞台や活躍した主人公が、あまりにもこの近江の地と関係が密であることをしみじみと感じております。

数多くの文学においても、蝉丸や松尾芭蕉など歴史研究・文学研究には隣県の京都・奈良と共に大変すばらしい地であると思います。京都・奈良と比べて地域の様子などについては、まだまだ知られておらず、近江の認知度が低いのはたいへん残念です。

「急がば回れ」の言葉が生み出された瀬田の唐橋も通勤路であり、多くの人々に近江の地のすばらしさを広める活動に、これからも少しでも励みたいと考えております。

京都府支部

今の私があるのは

支部長　廣田康男（54文）

大学を卒業して37年が経過しました。先日久しぶりに九段を訪れると、校舎が5号館まであることに驚くとともに、私どもの頃と違って、快適な学生生活が送れそうな環境を羨ましく感じたというのが率直な感想です。

私は昭和57年度の入学生、つまり柏キャンパス一期生です。2回生までは柏での学生生活でした。スクールバスなしでは通学できない状況は大変でしたが、今では懐かしく思い出されます。

部活動は合気道部に所属し、武道を習うことばかりではなく、たくさんの人生経験を、試練を与えてもらったことが、社会人になってから大いに役立ったと、今実感しています。

ゼミは、鎌田廣夫先生にお世話になりました。学問の厳しさをみっちりたたき込んでいただくとともに、人としての振る舞いもきつく指導していただきました。その教えは、お亡くなりになっても、私には時折聞こえてきます。

また、学友との酒を酌み交わしながらの語らいも良き思い出です。

今回、松苓会報への寄稿をきっかけに、大学生活を回顧しました。ここに記したのはその一端ですが、卒業後の中学校教員として、現在は教育行政に携わる身として、あの4年間は貴重であり、掛け替えのないものでした。

そして、今の私があるのは、二松學舍での学びがあったからこそと心底感じるに至りました。

ありがとう二松學舍。

大阪府支部

学生時代の思い出

支部長　齋藤　衛（49文）

昭和52年4月、東京での一人暮らしを始めたばかりの私は九段坂を上っていた。前からボタンダウンにチノパンをお洒落に着こなした集団が来て、声をかけられた。空手愛好会だと名乗る。空手？空手なら学ランでも着ていそうなものだが？（実際、あまり空手の練習はやらないサークルだった。）などと思いながら505教室の舞台の袖にある小部屋に連れていかれた。そこで二松の山椒大夫と名高い落研のN先輩に出会った。N先輩は、そのまま私を綜合警備保障株式会社（ALSOK）千代田事業部へ連れて行った。トレーナーにジャージ姿の私に、「クラブの練習中に抜け出してきたことにしよう」とレクチャーした。服装に無頓着だった私は服装に関する社会の常識を

初めて知った。事務所で筆記試験と面接を受けて採用された。後で知ったことだがN先輩には高額の紹介料が支給されていた。翌日から一泊二日の研修を受けた。自衛隊出身者が多かった。研修後配属されたのが日本興業銀行麹町別館であった。勤務先には二松の先輩がいた。4年のF先輩と2年のH先輩、そして、N先輩である。二松のすべてを教えていただいた。夜間勤務して翌朝そのまま登校した。勤務した日のほうが大学の出席率は良かった。私が卒業できたのは、このアルバイトに出会ったからである。

兵庫県支部

学生時代の思い出

支部長　武内昭徳（47文）

本学を卒業してから、早くも約半世紀が過ぎようとしている。今思えば、あまり勉強に熱を入れていなかった高校時代と比べて、本学に入学して、「よく勉強したな？」と感じている。高校は、地元ではお世辞にも良い学校とは言えず、どちらかと言うと悪名高い学校だったからだ。公立高校に落ち、公立高校からの編入試験を受けて、私立高校に入学した。高校入学当初から、思っていた言葉は、「鶏頭となるも牛後となるなかれ」だった。高校入試で苦汁を飲んだことで、「勝負は、高校受験ではなく、大学だ」と感じていた。

高校3年間、かろうじて国語では上位を守り本学に入学出来た。入学して在校生出身名簿を見た時、地元で最進学校と言われていた高校から入学生がいたことを知り、「勝負は、高校名ではない」と改めて感じた。

本学に入学して4年間、高校時代より「よく勉強したな」と感じている。

しかし、勉強というのは「学問」と言う意味ではない。部活動も行っていたからだ。現在もある「狂言研究会」だ。その当時は、現在教授をされている大蔵吉次郎先生が師範として指導されていた。そのご縁もあり、1年生の自演会後から大蔵流24世宗家の故大蔵弥右衛門先生のお宅に伺うようになり、学生生活を充実したものと出来たように思う。

大学の学生としてだけでなく、時にはプロの舞台を踏ませていただいた。年に一度の奈良での薪能、年末の御祭りにも同行させていただいたことがあった。私が在学していた頃をご存じの方は、覚えておられるかもしれないが、その当時私以外の部員は女子学生だったので、学内の部活動がある日は着物と袴と言う大正時代の学生スタイルで授業を受けていた。

本学を卒業して数年後、故大蔵弥右衛門先生が神戸でお稽古をやられている時に、ご指導を受けたことも記憶に残っている。

あれから約半世紀、私立高校・公立高校の教師を経て、現在も非常勤講師として、仕事を行っている。やはり、今から思えば本学での経験が今の自分の支えとなっていると感じる今日この頃である。

まだお声が掛かる間は、気力が続く限り、現職で頑張ることだろう。

奈良県支部

書は人　筆をもとう！

支部長　辻　一眞（いっしん）（39文）

近畿といえば大先輩の末吉榮三先生。御年102歳（要介護2）。まさに二松魂そのものです。

私も後期高齢者の仲間入りです。

大学時代　入学後、誘われて書道部へ〔中高全く筆もたず〕夏に志賀高原合宿。◎石橋犀水先生（漢字）◎鈴木竹影先生（仮名）漢字より仮名の方に興味がわき懸命に〔筆をもつ〕二年の夏に竹影先生突然死去。その後、仲田幹一先生の後に今関脩竹先生が……困惑状態。○中森晶三先生（観世流謡曲）水道橋能舞台での謡いの発表。◎鴻巣隼雄先生ゼミ（万葉集）今になって先生の書物や鴻巣盛廣著

の『万葉集全釋』を見る。

教員時代　大阪私学の高校で30数年奉職。〔全く筆もたず〕

第二の人生　平城遷都1300年の2010年　法相宗薬師寺にて授戒。南都の寺は学問寺。葬儀も檀家もない。荒廃した伽藍を、お写経によって復興させたいと、凝胤長老・好胤管主が、昭和42年から勧進。般若心経262字を越前の写経和紙に、一文字一文字写していく浄業。

かたよらない心／こだわらない心／とらわれない心／ひろくひろく／もっとひろく

これが般若心経―空の心なり。ご本尊のお薬師さまは、日光月光菩薩を脇侍に、の如く医者として日勤夜勤の看護師を従え、いつどんな時でも病苦を救う仏。我々の健康を見守る仏さま。近年、参拝者の関心は、専らお札やご朱印に。学生以来、再び〔筆をもつ〕日がやってきた。恩師を胸に日々精進です。

〝俗にいて俗にもあらず
隠遁にもあらず〟

喜びと感謝と敬いの心で。

終わりに油断大敵、健康第一。

和歌山県支部

大学時代の思い出と地元和歌山

支部長　明治利隆（47文）

松苓会役員に同期生が10名着任されており、総会で会えば大学生活の思い出がよみがえってきます。

国語と書道に興味を持っていた私は、漢文の先生の薦めもあり入学しました。

書道部に入り100名を超える部員が所属していることに驚きました。合宿では全員で武田節を唄ったり、「完徹」と声をかけ、徹夜で書き続けたりすることにも圧倒されたことを今でも覚えています。

また、先輩の指導のおかげで大きな展覧会に入賞することもできました。

2年生から先輩のアドバイスで文化クラブ連合会の仕事に関わり、3年生では文連の会長を務めました。

合同発表会や学舎祭の企画運営を通して、みんなで作り上げる喜びや達成感を味わい、クラブ員の友情を強く感じました。

下宿生活では、友達がよく遊びに来て学園ドラマを見ては共に熱血先生に憧れ、型破りな教師を夢見ていたものです。

卒業後は和歌山の県立高校で国語の教員となり、生徒会活動やクラブ活動にも取り組みました。退職した現在は、書道の講師として生徒たちと作品作りを楽しんでいます。

振り返れば大学時代の世代を超えた交流や経験によって成長し、このように充実した教員生活を送ることが出来たと感謝しています。

私は、紀の川の中流域にある根来寺近くに住んでいます。その寺のそばに、夏目漱石先生が明治44年和歌山で講演された、旧和歌山県議会議事堂が移築され、演奏会や講演の会のできる施設に生まれ変わっております。いつか本学におられるアンドロイドの漱石先生が、来訪されて「現代日本の開花」を講演されることを夢見ております。

お薦め本

『三島中洲詩全釈』（全五巻）

石川忠久編

発行者　学校法人二松學舎

『三島中洲詩全釈』石川忠久編（全五巻）をご紹介します。

この『三島中洲詩全釈』には、二松学舎の創立者三島中洲先生が、22歳〔嘉永5（1852）年〕から90歳〔大正8（1919）年〕までに詠まれた漢詩2849首が収められています。書き下し文、語意、訳が付され、年代順にまとめられていますので、容易に読み進むことができます。詠まれた内容は日常のこと、友人・知人・門人に関すること、旅先での出来事、大正天皇とのこと、二松学舎のこと等、多種にわたっています。

中洲先生の詩風について、石川忠久先生は、「概ね中唐より南宋に出入し、平淡の中にも奇巧が光る趣がある。五七言律詩の対句は若い頃から警抜な閃きを感ぜしめ、長篇の古詩は自在の運用の底に深い学力を蔵する。当代一流為るを失わない」と述べられています。

ぜひ手に取られ、中洲先生の漢詩の世界を味わってください。

『三島中洲詩全釈』は、全五巻44，000円（税込）ですが、本学卒業生は35，200円（税込）でご購入いただけます。

ご購入希望の方は、二松学舎サービス株式会社（電話 03-3261-6921）までお問い合わせください。

学生会員だより

新会長ご挨拶

学生会長　竹石翔馬
文学部２年

２０２３年度より学生会執行委員会会長に就任いたしました、文学部国文学科２年の竹石翔馬と申します。まだまだ至らぬ点が数多くありますが、学生会執行委員会一同、力を合わせてより良い学校作りに貢献していきたいと考えております。ご理解ご協力のほど何卒よろしくお願いいたします。

この度、学生会執行委員会の会長となりました。そこで、目標を大きく分けて２つほど述べさせていただきます。

１つ目の目標といたしまして、各大学行事（新入生歓迎式典・九段ＰＯＰ・創縁祭など）を完全対面形式で盛り上げていくことです。新型コロナウイルスの影響により、各大学行事がオンライン開催になったり、思うように満喫できなかったりという状況となっておりました。しかし、新型コロナウイルスの規制緩和に伴い、昨年度の創縁祭や今年度の新入生歓迎式典は完全対面形式で行うことができました。やはり完全対面という事で、来場者数も大きく異なり、活気のあるイベントとなりました。今後行われる九段ＰＯＰや創縁祭も完全体面形式で行っていく予定です。

本学行事に参加いただけるサークル団体様や来場者様が、より安心安全に楽しめるように引き続き感染対策等を行ってまいります。昨年度は全役員が初めての対面開催という事で、至らぬ点も多くありました。その反省を生かして打ち合わせを重ね、行事運営を行ってまいります。賑わいを取り戻した本大学へ、足を運んでみるのもいかがでしょうか。皆様のご来場を心よりお待ちいたしております。

２つ目の目標といたしまして、大学生活をより快適に過ごしていただけるような学校作りをすることです。毎年開催している定期学生総会などの場を有効活用し、学生一人ひとりの意見に耳を傾けていこうと思います。

定期学生総会だけではなく、常日頃から学生の意見に耳を傾けたり、各行事の際に作成しているアンケートを活用し、参加団体様や来場者様の意見を取り入れたりしていくことで、少しずつ大学生活をより楽しく快適に過ごせる場にしていきたいと考えております。学生会執行委員会一同、学生の皆様の意見一つひとつを大切に受け止めてまいります。

最後になりますが、このような目標を実現させていくために、大学内の機関や大学外の機関など、様々な方々と綿密なやり取りをしてまいりますので、皆様あたたかい目で見守ってくださると幸いです。１人の人間にできることは限られているため、皆様の協力を得ながら、みんなで目標を達成していこうと思っております。その際に、ご迷惑をおかけしてしまうと思われますが、学生の皆様のために動きたいという信念は、決して折れず曲がりませんので、お力添えのほど何卒よろしくお願いいたします。

サークル紹介

合気道部

木内瑠唯
文学部３年

こんにちは。二松学舎大学合気道部です。私たちは水曜日と金曜日の週２回で活動し、そのうち金曜日は合気会本部道場より先生をお呼びし指導していただいています。活動内容としては、師範稽古を中心に部員同士で意見を出し合い、お互いの技の練度をあげ、その成果を昇級、昇段審査、または武道館で開催される演武大会にて披露しています。昨年度までは２年生５人、１年生１人と寂しい雰囲気でしたが、今年は１年生が10人も入り、活気ある部活となりました。

さて、ここまで当合気道部について述べましたが、実際に合気道と聞いてピンとこない方もいらっしゃると思います。武道というと空手や柔道といった組手で競うといったイメージを待たれるかもしれませんが、合気道の場合は相手の力、または人体の構造を利用したカウンターをメインとした武道となっています。

また相手と競わないことを理念としており、試合ではなく、演武という形で披露します。そのためご年配の方や女性の方でも稽古に励まれているのが特徴です。

ここまで聞いてもまだイメージが湧かない方もいらっしゃると思います。百聞は一見に如かず。気になるなと思われましたら、ぜひ当部活にお越しください。

総合遊戯サークルのほほん

佐藤緒夏
文学部３年

総合遊戯サークルのほほんは、ボードゲームを中心とした様々なゲームを行い、学年学科を越えた交流を目的としたサークルです。現在60名ほどのメンバーを抱え、毎週二回活動しています。

私達のサークルでは、約40のボードゲームを所有しており、自由に遊ぶことができます。また、「discord」というアプリを活用し、サークルメンバーが校外での企画を立てたり、オンラインゲームで遊んだりするなど、サークル活動時間外でも交流を深めています。

文化祭などの大学行事では、サークルメンバーの興味関心のあることを冊子にまとめるなど、サークルメンバーの好きなことを形にできるような活動を心がけています。

また、ボードゲーム体験会を行い、サークルメンバー以外との交流の場も設定しています。

今後は、季節の行事などボードゲーム以外の活動も精力的に行っていこうと考えています。

友達を増やしたい方、先輩と仲良くなりたい方、ボードゲームが好きな方、楽しいことが好きな方、大歓迎です。

私達と一緒にのほほんと楽しい時間を過ごしましょう。

特別寄稿

三つの縁に結ばれて 漱石 青春の日の岡山（前編）

片山 由子（47文）

母恋し、漢学塾へ

青少年時代の夏目漱石と岡山をつなぐものが三つある。

その第一は、倉敷出身・三島中洲創設の二松学舎に学んだこと。四男三女の末っ子の漱石は、晩年の子とあって歓迎されず、生後すぐに養子にやられるも、養父母に不和が生じて九歳の時に実家に戻された。少年の頃から漢文好きで、中学時代は英語から遠ざかり、このままでは大学予備門の受験に不利とあって、中学校を退学、英語塾・成立学舎に入る決意をする。

ところが実母の死によって決意は一転、漢学塾・二松学舎に入ったのである。世間一般の末っ子のように甘やかされはしなかったが、家中で一番彼を可愛がってくれた実の母とわずか五年しか一緒に暮らせなかった彼は、母の面影を夢中で追い求めるようにして、好きな漢学の世界に浸った。母の死に揺れる十四歳の彼にとって、漢学は自分を慰め、元気づけてくれる唯一のもの。こうして没頭した漢学が、後に大学で修める英文学と融合して漱石の文学を育んでいくことになる。

好評の英語講師

東京帝大英文科に進んだ漱石は、文部省貸費生、特待生に選ばれるほど優秀で、大学二年時には東京専門学校（現・早稲田大）の英語講師に抜擢された。交流はないものの優秀さを買って彼を講師に推薦したのは岡山市出身の大西祝（はじめ）――これが漱石と岡山との第二の縁となる。

同志社で神学を、帝大で哲学を学んだ大西は当時漱石より三歳上の二十八歳、東京専門学校の専任講師であった。後に彼の哲学講義は、坪内逍遙の英文学講義と共に同校の二大名物とまで言われた。その彼が推薦した通り、漱石の講義はなかなか好評であった。島村抱月や後藤宙外と一緒に講義を受けた一人に岡山県北部・有漢（うかん）町出身の思想家・綱島梁川（りょうせん）がいる。

弁舌は明快ではないが、整然として穏和、綿密な説明の仕方は大西祝に似たところがあり、他の教師が窮した英文も何の躊躇もなく平然と解明して学生を感服させたと梁川は日記に記している。ここでの講義は松山の中学に赴任する明治二十八年まで続いた。

次兄の妻の実家訪問

講師となった明治二十五年の夏休み、漱石は大学予備門以来の親友正岡子規と一緒に、関西を旅行した。京都・堺と回った後、船で郷里に向かう子規と別れて、彼は岡山を訪れた。これが漱石と岡山との第三のつながり。そのきっかけとなったのは次兄・栄之助である。電信局に勤める彼は、岡山局に赴任中に当地の士族片岡機（はずむ）の長女・小勝を見初めて結婚し、その後東京勤務となって妻を伴い帰京。一戸を構えるまで漱石らと生活したが、結婚四年にして次兄は結核で死去。小勝は岡山に戻って再婚した。

漱石の来岡は七月十日頃のこと。元兄嫁小勝の実家・片岡家に逗留する。役場勤めの当主を前に漱石は制服の膝を正して銚子ちぢみの反物に水引きをかけ〝贈呈〟と記した土産物を差し出した。この〝贈呈〟がおかしくて、片岡家では後々まで話題になった。

片岡家は現在の岡山県庁舎南付近にあり、岡山市中心部を流れる旭川に臨む。夜ともなると川沿いに岡山の夏の風

物詩〝奈良茶〟の賑わいを見せた。奈良茶とは、天明の頃江戸浅草で女性の給仕で奈良漬けの茶漬けを供する店が評判となったのに始まる。江戸勤めを退き帰藩した七代目藩主池田治政が、田舎住まいの寂しさを慰めようと旭川原に奈良茶の店を開かせたのに端を発し、明治期には寄席、見世物小屋、遊廓までが立ち並び、夕涼み客で賑わった。その盛況は一枚刷りの絵にもなり、上方まで鳴り響いていた。江戸っ子漱石も目を見張り、松山の子規に宛て、

「夜に入れば河原の掛茶屋無数の紅燈を点じ納涼の小舟三々五々橋下を往来し、燭火清流に徹して宛然たる不夜城なり。君と同遊せざりしは返す返す残念」

と書き送っている。

片岡家には小勝の弟・亀太郎がいた。二年前の明治二十三年、勧業博覧会の見物に上京した彼は半月間夏目家に滞在し、同い年の漱石の部屋で共に寝起きして既に気心の知れた仲。連れ立って後楽園や岡山城天守閣にも出かけた。

七月十六日、亀太郎の案内で小勝の再婚先、西大寺金田（岡山市東南）の医師岸本庄平宅を訪問。岸本は二人を歓待した。児島湾で釣りをし、二キロ沖の鳩島で手料理で味わった。この小島は元禄年間備前藩が堤防用の石を切り出した所。金川の勘三郎なる者が贋金造りをしたと伝わる岩窟があり、漱石らも面白半分に入ってみたかもしれない。

また近くの九蟠海岸へ越中褌一つで蛤掘りに出かけ、十個ほどの大きな貝の入れ物に困り、褌に包んでフリチンで村道を帰ってくるなど、野趣を満喫した。

兄嫁へのレクイエム

岸本家で三泊し、片岡家に戻ってからの漱石は、ぼんやりと物思いにふけるようになった。再婚した元兄嫁の幸せそうな様子を見て、三番目の兄・和三郎の亡き妻登世のことを思った。悪阻をこじらせて死去した彼女の一周忌が、間もなく来ようとしていた。

登世が嫁いできた頃の夏目家は、長男次男と相次いで病没。残る男児は三男と末子の漱石だけとなり、父は漱石の籍が養家在籍のまま十年以上放置してあるのにあわてて談判の末、ようやく取り戻すといった始末。そんなみそっかす扱いの漱石にも登世は同じ家族の一人として温かな心遣いをしてくれ、それが心にしみてうれしかった。

神官の娘である登世は、上品で聡明な背のすらりとした細面の美人――こんなところも漱石が彼女に魅かれる理由で、それは少年の脳裏に刻まれた、奥ゆかしくて賢げな母の面影に重なった。

兄・和三郎の放蕩癖は結婚後も、ましてや登世の容体が険悪になっても改まらず、漱石はこの薄情な兄に義憤を覚えた。漱石は登世をいたわり、彼女を抱いて二階への上り下りを助けることもあった。登世にしても家庭的な愛情に縁の薄い漱石に母性愛のようなものを感じ、遊び好きの夫よりも英文学を学ぶ優秀で心優しい義弟に魅かれていったのではなかろうか。

明治二十四年夏、漱石はこの兄嫁の死を子規への手紙に記す。「毅然として公平正直、洒々落々とした人柄は男にもめったにおらず、人間として誠に敬服すべき婦人」と称賛した後、彼女の死を悼んで、

「一片の精魂もし宇宙に存するものならば、二世と契りし夫の傍らか、平生親しみ暮せし義弟の影に髣髴たらんかと夢中に幻影を描き、ここかかしこかと浮世の絆につながるる死霊を憐れみ、うたた不憫の涙にむせび候」と痛嘆。

哀惜の句として

何事ぞ手向し花に狂ふ蝶
鏡台の主の行衛や塵埃

など十三句を添えている。

（次号に続く）

筆者は、大学院前期課程修了後に帰岡。県立高校から岡山理科大学附属高校に勤務する傍ら、地方誌の編集に携わり、岡山に関する文学者の執筆を行ってきた。

卒業生の出版図書

千葉 仁さん（27文）
漢詩集『蕃山詩鈔』私家本

宮城県前支部長の千葉仁さんの漢詩集が完成した。「春・夏・秋・冬・人」の部立てになっていて、それぞれに自然への畏敬の念と、人間に対する信頼と思いやりに満ちあふれている。

例えば、

凱　風

凱風南澗草初萌
古徑徘徊聽鳥聲
詩卷獨繙閑踊詠
藏王殘雪逼人清

（書き下し文）

凱風の南澗に草初めて萌ゆ
古徑を徘徊して鳥聲を聴く
詩卷独り繙き閑かに踊詠すれば
蔵王の殘雪人に逼って清し

最後に蕃山を号としたことについて詠み、この漢詩集を締めくくっている。

蕃山登頂遂臻千
春夏秋冬三十年
雲居國師靈廟跪
遠望街巷與樓船

（書き下し文）

蕃山の登頂遂に千に臻る
春夏秋冬の三十年
雲居国師の霊廟に跪づき
遠望す街巷と樓船とを

興味・関心のある方は、ぜひ著者（〇二二－二二六－一一八二）へ連絡をおとりください。

〔二上久芳（44文）〕

磯 水絵名誉教授（41文）
『文学と歴史と音楽と』和泉書院

19，800円（税込）
2023年2月20日刊

説話文学、随筆文学研究の傍ら、日本音楽史を追究してきた著者の後半生の営みの集成。本書には音楽史研究の基盤となる院政・鎌倉期の記録―大江匡房の『江記』、『江談』、中山忠親の『山槐記』、『吾妻鏡』等より儀式音楽の実態を例示する。後半は、『方丈記』成立八〇〇年、鴨長明没後八〇〇年の記念論文を収録して著者の長明研究の方向性を示し、また、説話文学研究者として、『宇治拾遺物語』、『十訓抄』、『古今著聞集』といった中世説話集を中心に、音楽以外の諸道―蹴鞠道、書道、医道―の説話等を紐解いている。

〔和泉書院HPより〕

齋藤祐一さん（51文）
『明治・大正の文学教育者』新典社

2，970円（税込）
2023年6月20日刊

本書は、明治・大正期の文学教育者である細田謙蔵や木内柔克（共に二松学舎卒業生）、小原要逸（教え子に黒沢明）など、旧制京華中学で国語教師を務めた15名の素顔を、文学史や文化史などとの関わりにもふれながら描いた1冊です。京華中学・高等学校で教壇に立っていた著者が、在職中同校の『国語科通信』に連載していたものを基にまとめたもので、これまであまり語られることのなかった、旧制中学の国語教師たちが生徒に向き合う姿や教師その人の生涯に光をあて、明治・大正期の中等教育のようすを克明に描き出しています。

〔鈴木信子（51文）〕

阿部正人さん（53文）
『里山太平記　川猿が遊び尽くしたクヌギ林の50000日』小学館スクウェア

1，540円（税込）
2023年5月刊

新卒で勤めた自動車会社のPR誌を皮切りに出版社を経て、編集や広告を作る仕事をしてきました。本書は金沢で過ごした子供の頃の原体験をもとに書いたショート物語集です。防火用水をかいぼり（水抜き）したり、釣り餌のミミズを養殖したり、特殊な蜜を木に塗ってクワガタを集めたり、笠谷幸生さんを真似て大屋根から飛び降りたり、昭和の里山遊びの〝とめども尽きぬ日々〟に女性彫り師による版画をそえています。かつて月刊誌BEPAL（小学館）に連載したものに昨今のカワウソをめぐる思索なども加筆しています。

〔著者〕

令和５年度　松苓会予算

令和５年４月１日～令和６年３月31日

○　収入の部

（単位：円）

前年度繰越金	6,536,349
入会金	4,055,000
（会費）	
新卒者終身会費	10,800,000
既卒者終身会費	300,000
小計	11,100,000
寄付金	300,000
雑収入・受取利息	2,000
合計	21,993,349

○　支出の部

事業費	
松苓会報等発行	
印刷・制作費（70・71号分）	1,200,000
発送費（70・71号分）	2,450,000
『茯苓』発行	0
小計	3,650,000
卒業生交流事業	
ホームカミングデー	600,000
小計	600,000
卒業生支援事業	
支部運営助成費	1,300,000
支部報発行助成費	300,000
支部強化助成費	100,000
同期会等助成費	300,000
小計	2,000,000
母校支援事業	
教育振興資金助成費	1,000,000
教育事業後援費	50,000
小計	1,050,000
在学生支援事業	
学園祭助成費	100,000
課外活動助成費	200,000
教育支援助成費	800,000
入学記念品費	300,000
卒業記念品費	900,000
学生会員活動支援費	200,000
小計	2,500,000
事業費合計	9,800,000
運営費	
会議費	200,000
職務手当	0
業務手当	
出張交通費	2,000,000
出張宿泊費	300,000
本部業務交通費	500,000
会議・実務費	1,400,000
小計	4,200,000
通信・配送費	150,000
備品費	100,000
印刷費	350,000
消耗品費	150,000
慶弔費	100,000
謝礼金	50,000
手数料	80,000
賃借料	240,000
雑費	20,000
運営費合計	5,640,000
特別会計	
周年事業積立	1,000,000
松苓会奨学基金	500,000
松苓会費積立金	2,000,000
特別会計合計	3,500,000
予備費	3,053,349
合計	21,993,349

令和５年度　松苓会特別会計予算

１　周年事業積立金

（収入の部）

令和４年度からの繰越	4,755,967
令和５年度繰入	1,000,000
合計	5,755,967

（支出の部）

	0
合計	0

２　松苓会奨学基金

（収入の部）

令和４年度からの繰越	9,450,610
令和５年度繰入	500,000
令和５年度貸与返還金	375,000
利息	76
合計	10,325,686

（支出の部）

令和４年度給付奨学金	996,000
合計	996,000

３　松苓会費積立金

令和４年度からの繰越	75,308,013
令和５年度繰入	2,000,000
合計	77,308,013

令和４年度　松苓会収支決算書

令和４年４月１日～令和５年３月31日

○　収入の部

（単位：円）

前年度繰越金	6,907,723
入会金	4,035,000
（会費）	
新卒者終身会費	11,040,000
既卒者終身会費	690,000
小計	11,730,000
寄付金	227,000
雑収入・受取利息	879
合計	22,900,602

○　支出の部

事業費	
松苓会会報等発行	
印刷・制作費（68、69号分）	1,063,700
発送費（68、69号分）	2,292,911
『茯苓』発行費	0
小計	3,356,611
卒業生交流事業	
ホームカミングデー費	370,000
卒業生異業種交流会費	0
小計	370,000
卒業生支援事業	
支部運営助成費	675,361
支部報発行助成費	155,665
支部強化助成費	0
同期会等助成費	0
小計	831,026
母校支援事業	
教育振興資金助成費	1,000,000
教育事業後援費	0
小計	1,000,000
在学生支援事業	
学園祭助成費	100,000
課外活動助成費	40,000
教育支援助成費	495,545
卒業記念品費	795,900
学生会員活動支援費	216,887
小計	1,648,332
事業費合計	7,205,969
運営費	
会議費	47,184
旅費・交通費	1,018,321
職務費	324,000
通信費	62,382
備品費	326,652
印刷費	315,050
消耗品費	57,472
慶弔費	38,820
謝礼金	0
手数料	41,572
雑費	17,921
運営費合計	2,249,374
特別会計	
周年事業積立金	1,000,000
松苓会奨学基金	500,000
松苓会費積立金	2,000,000
特別会計合計	3,500,000
予備費	3,408,910
合計	16,364,253
○収支残高（次年度繰越）	6,536,349

令和４年度　松苓会特別会計決算書

１　周年事業積立金

令和３年度からの繰越	4,755,967
令和４年度繰入	1,000,000
合計（次年度繰越）	5,755,967

２　松苓会奨学基金

（収入の部）

令和３年度からの繰越	8,950,534
令和４年度繰入	500,000
令和４年度貸与返還金	0
利息	76
合計	9,450,610

（支出の部）

令和４年度給付奨学金	0
合計	0

（収支）9,450,610−0=9,450,610（次年度に繰越）

３　松苓会費積立金（終身会員積立金の名称変更）

令和３年度からの繰越	73,308,013
令和４年度繰入	2,000,000
合計（次年度繰越）	73,308,013

令和４年度会計収支決算は以上のとおりです。

令和５年４月19日

二松學舍松苓会会長　廣田　克己　㊞
二松學舍松苓会事務局長　佐藤　修　㊞
二松學舍松苓会事務局　島　りつこ　㊞

会計監査報告書

令和４年度（令和４年４月１日～令和５年３月31日）の会計執行状況について監査の結果、諸帳簿の整備、ならびに、金銭の管理状況は適正であり、収支に誤りのないことを認めたのでここに報告致します。

令和５年４月20日

二松學舍松苓会監事　田邉　義博　㊞
二松學舍松苓会監事　木村　誠次　㊞

表敬訪問

令和5年7月26日（木）、松苓会平野光治会長以下新役員が学校法人を表敬訪問し、水戸英則理事長・五十嵐清常任理事・西畑一哉常任理事としばし懇談を行った。

事務局だより

令和4年度常任幹事会

（第6回）3月18日（土）

主な議題

1　附属高等学校野球部の選抜大会出場対応
2　令和5年度第28回定期総会
3　定期総会の議題及びその内容
4　各部会関係

令和5年度常任幹事会

（第1回）5月13日（土）

主な議題

1　令和5年度定期総会議題について
2　令和5年度定期総会の運営等について
3　各部会関係
4　感謝状の贈呈について

（第2回）7月15日（土）

主な議題

1　令和5年度松苓会役員幹事会、定期総会を終えて
2　松苓会報（第70号）
3　感謝状贈呈候補者
4

平成13年度以前の卒業生の方へ
―終身会員手続きのお願い

松苓会の運営資金は、ほとんどが終身会員の会費で賄われています。終身会費1万円を納入していただくと終身会員となります。会報を毎号お送りし、ホームカミングデーの案内もお送りします。

終身会員の手続きをお取りください。

寄付金のお願い

松苓会では、会の発展のために会員の皆様に寄付金のお願いをしています。

松苓会の事業推進と財源確保のために、1口千円で寄付金を募っています。

ご協力をよろしくお願いいたします。

支部の活動の報告については、HPで掲載いたします。

訃報

雨海博洋氏　名誉教授
令和5年6月10日逝去
享年99

雨海先生は、昭和42年本学着任。附属図書館長、文学部長などを歴任。平成5年4月～同9年3月まで学長を務められ、同年4月に名誉教授。

学校法人二松学舎においては、昭和58年9月～平成9年3月まで評議員、昭和62年～平成9年3月まで理事、平成3年9月～同5年3月まで常任理事を務めるなど、本学の教育研究活動に貢献され、平成13年4月29日、勲三等旭日中綬章を受賞されました。

雨海先生が学生時代に代表となり、当時有名な作曲家の古関裕而氏に依頼して作製した「学生歌」は、今も附属高校野球部の応援など本学の士気を高める際に歌い継がれています。

山極　晃氏　客員教授
令和4年9月12日逝去
享年93

溝口貞彦氏　名誉教授
令和4年12月26日逝去
享年84

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

表紙

新型コロナ感染症5類移行後に開催された松苓会定期総会。各都道府県から支部長が参集。

本部役員任期満了にともない新会長、新監事が承認された。2期8年、会長を務めた廣田克己氏からバトンを受けたのは平野光治氏。

創設92年目を迎えた松苓会の新たな牽引役にエールが送られた。

二松學舎松苓会報 No.70

創　　刊　昭和62年12月1日
発　　行　令和5年10月1日
編　　集　二松學舎松苓会
住　　所　〒102-8336
東京都千代田区三番町6-16
電　　話　03-3261-7408　FAX　03-3261-8914
振替口座　00180-5-160343（郵便局払込取扱票）
印　　刷　㈱サンセイ

編集後記

令和5年、中秋の70号をお届けします。連載「松苓会支部長だより」は第3回。関西各支部長の学生時代から現在に繋がる思い溢れる寄稿をいただきました。次号は中部・北陸甲信越編。支部長の皆さま、よろしくお願いします。

本報は二松同窓生の交流の場です。皆さまからのご寄稿、ご感想も常時お待ちしています。また、ホームページでは支部活動はじめ、本報で紹介できなかった情報も掲載。併せてご活用ください。

HP https://www.nishogakusha-u.ac.jp/shoreikai/index.html

二松學舎大学（松苓会）
ホームページ　www.nishogakusha-u.ac.jp
松苓会 E-mail　shourei@nishogakusha-u.ac.jp